

平成25年度 東京都立白鷗高等学校・附属中学校経営報告

校長 若井 文隆

本年度重点目標は4期生の進学実績の確保と中高一貫教育の成果検証を踏まえた教育活動の展開にあたった。特に、4期生の進学結果が中高一貫教育校としての本校に対する評価となることから、教職員一同心を一つにして教育活動に取り組んだ。その結果、進学実績は当初目標を概ねクリアできた。しかし、継続して取り組む課題も多く残っており、そのような1年を振り返りつつ報告としたい。

※ Aは概ね達成できた。Bは概ね達成したが今後も継続が必要。Cは達成できなかったのさらに継続

項目	取組目標	達成時期	結果	達成度	
① 学校運営	ア	中高一貫教育校の検証結果の踏まえた教育活動の継承と、新たな取り組みの策定。	3月	中高一貫教育校としての教育活動には成果が見られたが、新たな取り組みの策定はできなかった。	C
	イ	分掌及び学年、教科での年間目標と年度末の検証の実施。	3月	各教科及び各分掌による年度末の検証を実施し、次年度の取り組みに生かしていく。	B
	ウ	各分掌、教科会における中高の情報交換の促進と統一した指導体制の構築。	3月	中高における各分掌及び教科で連携を図ることはできた。さらに指導体制の強化を図る。	B
	エ	広報活動、入学選抜等を中心にさらなる経営企画室との連携強化。	2月	広報活動は教員が中心となつての実施であった。入学者選抜は経営企画室の積極的な関与もあり強化が図れた。	B
	オ	年間3回の授業研究月間を設定し、全教諭が3回以上の授業見学を実施する。	3月	授業研究月間の設定はできなかったが、教員が意識的に他の教員の授業を見学し授業力の向上に努めた。	B
	カ	SPP事業の実施及び理数教育チャレンジの取り組み	8月	信州大学等の協力を得て、各種の発表会で研修成果を発表した。	A
② 学習指導	ア	生徒による授業評価および生徒実態調査を2回実施し、これらの結果分析を授業に反映させ、次年度の教科目標を策定する。	9月 1月	授業評価における自由意見欄などを工夫し授業改善に生かせるようにした。生徒実態調査は今後も継続的に行い、学校運営に生かしていく。	B
	イ	教科別指導方法の教科内検討会の実施と進度の分析を行い、教科指導に関するさらなる工夫・改善をおこなう。	2月	分析会は予定通り実施し、各教科の横断的な連携の推進を図った。次年度以降、学力の伸長を図るための対策を講じること。	B
	ウ	生徒指導資料のデータベースを図る。	3月	成績推奨ファイルの活用は図れたが全教員が利用できる体制をつくること。	C
	エ	東大生等のチューターの活用と自習室の充実を図る。	3月	チューターの活用は定着してきた。さらに生徒の要望等に応じた活用を図ること。	B
	オ	適切な宿題や課題を課することにより自宅学習時間の確保を図る。	2月	1年2時間19分・2年1時間34分 3年1時間3分・4年1時間32分 5年1時間34分・6年3時間38分	B
	カ	英語、漢字などの各種検定に対する年間実施計画の策定。	3月	教科の協力のもと、各種検定は組織的に実施でき、成果もあがっている。	A
キ	学年検討会・センター検討会等4回以上の実施。	3月	検討会は卒業生も含め4回実施した。今後は、さらにきめ細かな対応策の策定を行う。	B	

③ 進路指導	ア	5教科による勉強合宿の実施により、学力の伸長を図る。	8月	5教科での実施は定着したが、参加生徒の意識を更に高めること。	B
	イ	自己の学力把握のための実力テストと模擬試験の実施。	3月	1年から6年までを通した白鷗模擬試験計画は出来上がったので、模試を分析し、進学指導への活用をさらに図ること。	B
	ウ	長期休業中の補講・補習の参加者延べ2000人以上。	1月	6年46講座4752名・5年23講座1257名・4年12講座1021名・3年12講座830名・2年7講座1010名・1年6講座1377名 総計10247名	A
	エ	国公立大学・難関私大への実質進学者数80名以上。	3月	国公立進学者41名・難関私大（早慶上理）進学者25名計66名	B
	オ	難関国立大学への合格者10名以上。	3月	9名（東大5・東工大1・一橋大1・千葉大医1・防衛医科大1）	B
④ 生活指導	ア	あいさつの励行と時間厳守、制服の着こなし等を基本的な生活習慣の確立と規範意識の育成を図る。	3月	制服着用週間を設定するなど制服の着用指導にあたったが、指導を継続的に行う必要がある。	B
	イ	中高一貫校としての行事の検証と工夫・改善を図る。	10月	学校行事や学年行事を通して、生徒一人一人がリーダーとして活躍できるように指導の工夫を図った。地域連携は良好である。	A
	ウ	自主的・自律的な生徒会、委員会活動とその活性化を図る。	3月	生徒会を中心に文化祭において宮城県の高校の支援のための企画を計画・実施した。他校生徒会（桜修館中等教育）との交流も実施した。	B
	エ	部活動の活性化を図り、関東大会出場以上3団体、中学では都大会出場3団体以上。	3月	ほぼ全生徒が部活動に加入するなど活性化は図られている。高校百人一首部は全国大会に出場。	B
	オ	年間皆勤者数、学年平均50名以上。	3月	1年67名・2年68名・3年36名・4年93名・5年38名・6年19名（3年間）	B
⑤ 募集広報	ア	学習塾等への訪問30以上。	1月	校長のみで13箇所	C
	イ	中学校説明会参加者5000名以上。	1月	学校説明会約4667名 学校公開来校者2950名	A
	ウ	中学校入試倍率7.0倍以上。	3月	7.68倍	A
	エ	高校説明会参加者500名以上。	1月	学校説明会約560名・施設見学会420名・授業公開344名	A
	オ	高校入試倍率1.7倍以上。	3月	1.18倍	C
	カ	ホームページ委員会の充実を図り、内容のさらなる充実と、週に一度の更新ペースを維持する。	3月	HPのリニューアルを図り、総務部担当と学年や部顧問との連絡を密にし、ほぼ週1回程度の更新を行なった。更に内容の充実を図る。	B
⑥ 健康推進	ア	生徒の状況把握を行う全体会の実施。	2月	専門医による研修会を実施し、生徒理解に役立てることができた。	B
	イ	カウンセリングチームによる個別指導の徹底。	3月	管理職、カウンセラー、養護教諭によるケース会議を実施し、生徒の状況把握や生徒理解を図った。	B

	ウ	健康推進のための講演会実施。	3月	生徒を対象にした健康講話を実施し、健康推進に努めた。	A
⑦ 情報活用	ア	I C T機器を使った2回以上の授業研究の実施。	3月	多くの教員がI C T機器を使った授業を実施しているが、研究はできなかった。	B
	イ	I C T機器を活用した教職員の情報共有の促進。	3月	I C T推進校の指定でなくなったため、学習コンテンツへの応募は減少したが、教材開発には積極的に取り組んだ。	B
⑧ 国際理解教育	ア	海外修学旅行及び海外短期留学の内容の充実。	2月	現地校の熱烈な歓迎もあり交流は大きな成果をあげた。短期留学も希望者が多く、さらに内容の充実を図る。	A
	イ	国際交流の活性化を図り、留学生等の受入の活性化。	3月	今年度は留学生の受入れはなかったが、次世代リーダーで3名の生徒が留学中である。	B
	ウ	海外の学校との姉妹校提携と具体的な連携の実施。	12月	オーストラリアの受け入れ校と姉妹校の締結を行ったが、具体的な取り組みがまだ構築できていない。	B
	エ	日本の伝統と文化理解教育の積極的発信。	3月	和太鼓部等が地域のイベントに参加するとともに、浅草観光連盟主催の行事にも積極的に参加した。	A
⑨ 地域連携	ア	中学の地域交流15カ所以上。高校の地域交流10カ所以上。	3月	中学伝統文化体験11箇所、中学職場体験43箇所、高校連携13箇所	B
	イ	大学進学に向けた保護者向け講演会の実施。	3月	双鷗会(本校PTA)と協力し、予備校の講師を招き講演会を実施した。	A
⑩ 経営企画室	ア	適正な予算執行及び経営計画に基づいた予算計画の策定	3月	企画室職員と連携を図りながら適性に執行及び策定を行った。	A
	イ	行政系職員と教員系職員の連携を強化し、円滑な教育活動の推進を図る。	3月	連絡を密に取りながら、教育活動を展開したが、一層の連携強化が必要。	B

主な目標項目と数値目標

項目	目標	対象	24年実績	25年度実績	目標数
②	自宅学習時間	中学生	1時間32分	1時間39分	2時間以上
		高校生	2時間18分	2時間14分	2.5時間以上
③	進路決定	国公立大学・私立難関校進学者数	合格者104名 進学者63名	合格者122名 進学者66名	80名以上
		難関国公立大学合格者	8名	9名	10名以上
③	夏季講習参加者	中学生	延べ3655名	延べ3217名	延べ500名
		高校生	延べ9636名	延べ7030名	延べ2000名
④	皆勤者数	中学、高校学年平均	40名以上	平均60名(1~5年)	50名以上
⑤	説明会参加者	中学校	9857名	7617名	4000名以上
		高校	1070名	984名	500名
⑤	一般入選倍率	中学校	8.05倍	7.68倍	7.0倍
		高校	1.69倍	1.18倍	1.7倍
⑨	地域交流	中学校	61カ所	54カ所以上	15ヶ所以上
		高校	12カ所	13カ所以上	10ヶ所以上